

北游紀程

乾

卷

| |
|------|
| 特別 |
| 14 |
| 1919 |
| 54 |



北遊記程

乾亨

一 ことしはにんじふと申す七月の中は梅雨さし
 けふもまた雨のそとに暑さの好い風ありて
 そろく雨のそとに風をあたふゆゆとさ
 こんはゆゆと風をあたふゆゆとさ
 二日とてゆゆと風をあたふゆゆとさ
 三日もまたゆゆと風をあたふゆゆとさ
 先をゆゆと風をあたふゆゆとさ
 癖あるゆゆと風をあたふゆゆとさ
 七日もまたゆゆと風をあたふゆゆとさ

お七のき
と伝言をききしに郡郷紳をいふあまも物事のき
四と流氣満世、はしるをりて入る事さるるや操始
とアット計りよる事いれしとをいれしと
折子傳心とて我々の酒肴持この用と名ある梅屋を焚
たかして先づ一杯を飲目け得るうた也
酒次番頭をばしと川小、松島の縁を採る先づ何れ行
くところを尋ねて先づ中山と登りて池眺しぬる松
島、あつて、又川小多賀城を渡るゆるて何うさ
回く松島を舟り塩竈、道し塩竈を舟り
多賀城を舟り、岩切の停車場に出で海を舟り
仙臺の停車場と即ち行程一決し七のき

の海舟に投す

仙臺の停車場に下りて海舟を投すこと岩切利府の
二驛を往、松島驛に下車し、又ゆる人車を假
て一里有半手松村より入、そんなるを車と書きて
七凡そ四五町の急坂を攀りて中山の停車場に
さる也余と仙臺を舟りてゆるて松島
驛に下車せば松島の停車場に目届目の方
まゝとゆるし何れを問ふ松島を改め敷村を舟
ちて大村とゆるし停車場に花のふらとゆるし未だ松
島の片雲を舟りて松島の停車場に降りて田子
小丘陵の地伏すゆるし松島の停車場に降りて

リ行ふは深湯寺とて事なりと云ふ事ありて遠く至るの妻或る先
きふ陸より之^山上段へ生る化し云々の時
と云ふや湖月翁の之を後して歎息するもの之
んをいふ事

此山へ登るも事ありて此の事と云ふ事ありて
しんをいふ事 聖上の行幸を証し寺の御
起子大光程を海く^山大仰寺と云ふ所の女
大仰寺と云ふ事。若菜を喫する二極杖僅に湯
をいふ事と云ふ事下

手抄 村山林庵と結たる事ありて杖の方向は行くこ
と一里方古木抄所天と云ふ一修り石砌迄は海

涙と云ふ事子細ありて^山木末新の唯此事事^山律年
境の道ありて試之と云ふ事ありて瑞雲山山内御
禪寺と云ふ事ありて山つゝ入る中門
中門ありて左側は^山巖壁と云ふ事ありて洞窟ありて
さき丈と云ふ事ありて^山石壁ありて^山石壁ありて
法身像ありて^山石壁ありて^山石壁ありて
七^山石壁ありて^山石壁ありて^山石壁ありて
ま^山石壁ありて^山石壁ありて^山石壁ありて
道師の草と云ふ事ありて中門ありて木材腐蝕を
し^山石壁ありて^山石壁ありて^山石壁ありて
の事ありて左側は一大^山石壁ありて^山石壁ありて

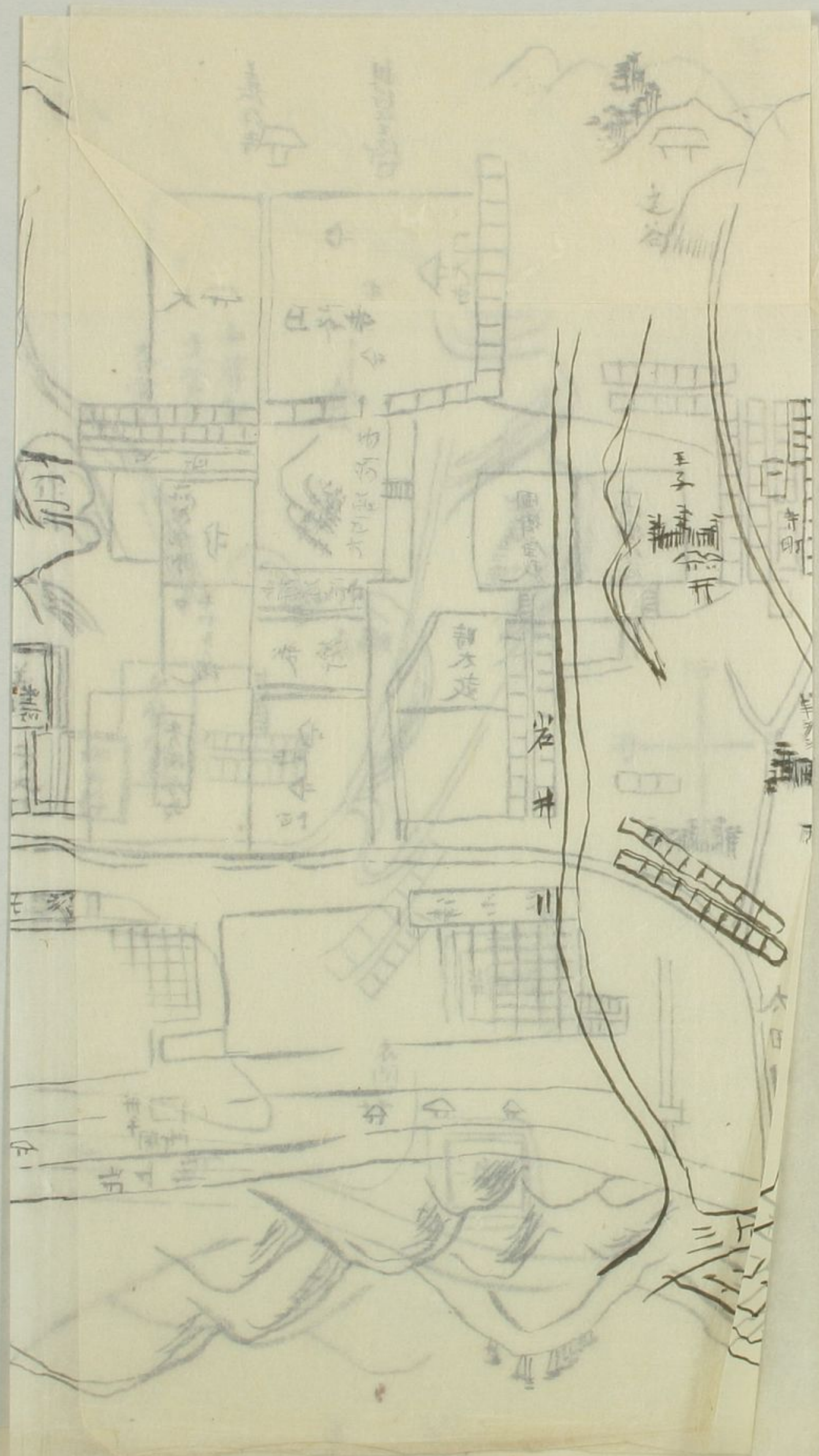
仔細に本寺の沿革を叙し聖なる註釋の筆をふるも
あまの傳をききしより久しき稱傳の久きをいひて
と傳ふる定ん誤傳のなきも辨るるもその如く
本寺の記と目撃する。ふん然して本寺を叙する本寺

佛殿を堅三十

一間横十二間紀妙能のま材を挿して建梁すと
まお壯大なるべし堂の正面に天蓋とて佛の
方をあましく飾りて正に探膚の像をまゝ候の
像と稱し短而像の織り形の前に物を載せ
甲配扇をまゝし床に坐して觀るも
眼を炯々人を射然活きとし禪僧の住ん
て母本堂支堂に代々をえり障壁は目指し
は金銀地を以て法眼三樂永徳行高なる本寺
の事とすまの成りり片紙とすも得難きの名
画と稱し櫛の彫刻又精を極め眼を入るる
一として珍貴の情をたさるるなり就中上々

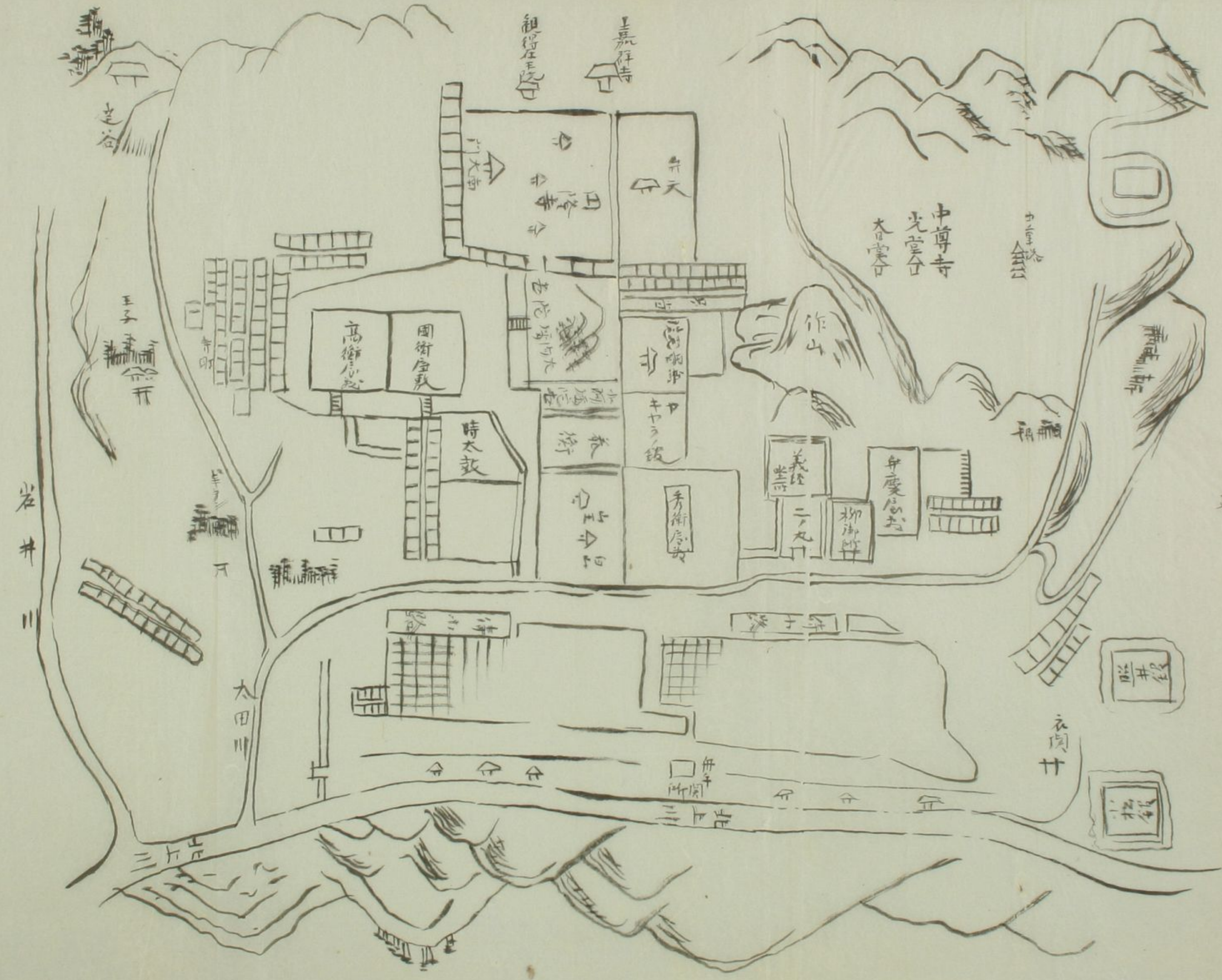
上勳四等大野東人之所置也。天平寶字六年歲次壬寅冬，議東海東山節度使徑四位上仁部者卿並按察使鎮守節度使原惠美朝臣朝猶修造。按多賀城即鎮守府，朝猶即府帥也。是時朝猶之父押勝專政，給更舊章，官名紀年盡倣唐制。此記里程亦用唐尺，彼一里毋當我四町四十八步弱，所謂云蝦夷國界一百廿里者，即今十六里弱，則隣境夷民猶授王化，府城修築之所以不可已也。此碑前於燕淳數百年，而色澤反不及焉，然其文

簡樸，其字甚勁，決非後人之所能捏造。余嘗讀文祿清談云：永祿中，宮城郡人掘得古碑，尋後埋之。其文記四方里程，又嘗讀大戶侯光國卷，仙甚，侯書曰：有竊聞貴邦宮城古碑，頗毀破，損宜加修理之。文則原碑毀壞，重刻建之，亦未可也。或謂朝猶修倣時，未置鎮守府，故署官銜稱鎮守守軍，不稱鎮守府守軍，不知太平府帥稱太平守帥，近衛府大將稱近衛大將，諸省卿輔亦稱中務卿，稱治部大輔，何獨容於此。但朝猶從



又のあまゆゑとそふ任を行本を（屋敷）托したぬぬき杖
 つぎとそふ異形の物も替りて暑熱を肩し（立）て
 北の方回道を行くこと之所くして新道二道の岐の
 ちあるとこみちを杉並木のつらな杉段路あると登る
 こと四五所くして中尊寺の懸崖に達す此を夜
 堂古庵の眺み散布するところ多し道する喋り
 説ゆきぬもこと後供難辨する所多あり之
 せえとて固み（後の説）月謝一し平木下果て
 怒罵朝天すぬも彼れ七亦我説を解し得
 てるこの平氣おつてさう喋りたるも一回之
 へう一笑なり

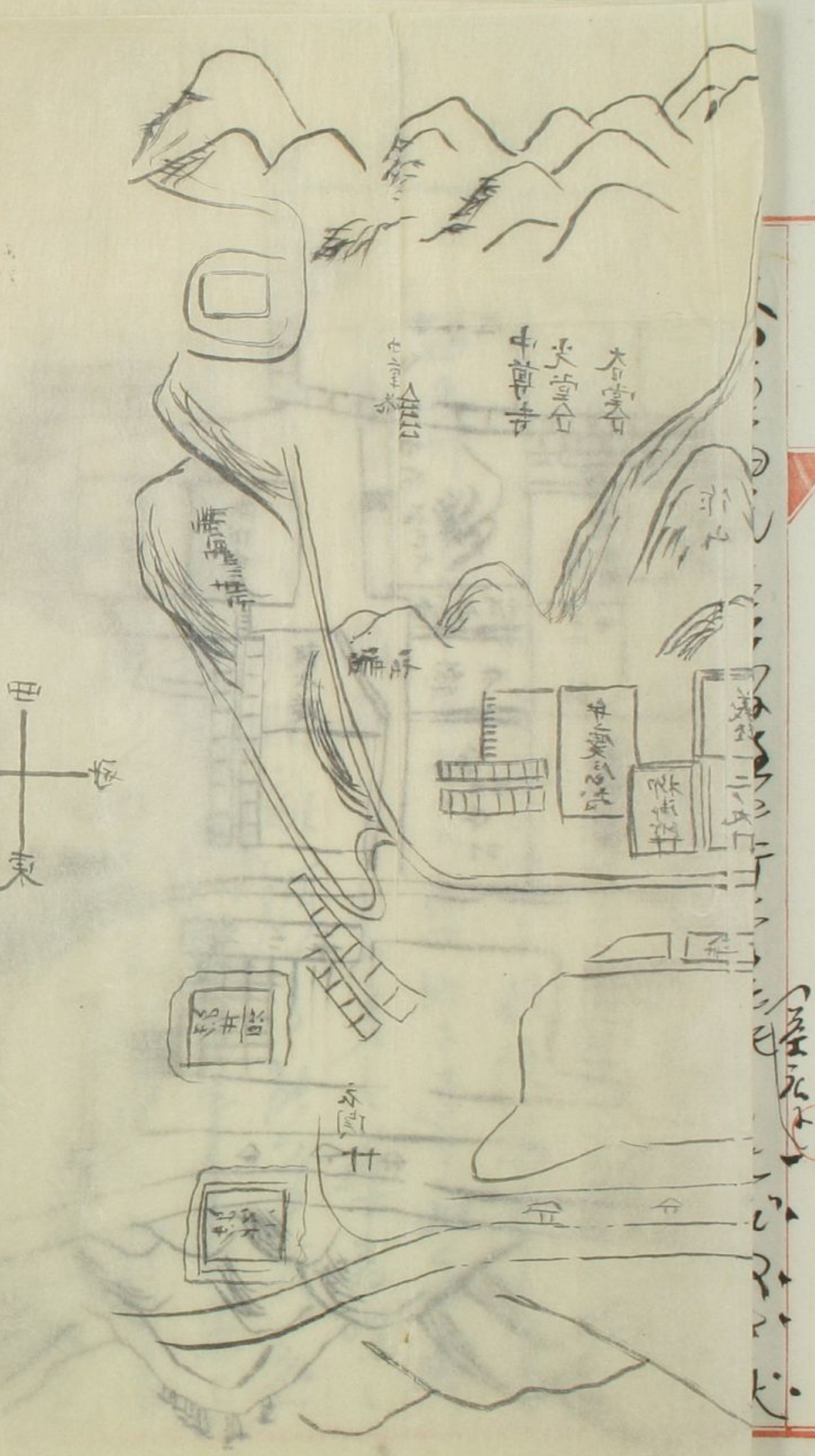
平泉古図



怒罵朝天すのち彼れ七亦我後を解し得
 平泉のこころをわすれず
 一〇〇〇



下泉寺圖



の以て四僧の岐寺に接して鳥をとりて而して
其の傑心うしく東鏡に記す。不之るたの
めし

山隆寺安丈六藥師及十二神、雲慶所造、
熟玉以点腫、三年而成、其銜施其方以貴
色百兩、熟鳥羽百尾、徑七河水豹皮六十餘枚、
安達絹千匹、希綿細布二千端、信夫毛地摺
千端而贈之、雲芝、其餘產山生海物、錫奇
悉怪鳥、別寄生美絹三般、雲芝、白嘉賜
之厚、俱足可貴也、特美絹甚愛之、其銜重

寄三般時其珍妙之、言盈宇洛中後、
元聽、鳥羽希甚惜、東出、其銜患之、閉戶、
漿小、七、以禱之、且歎之、九、修、其、白、殿、連、諸
上、有、勅、許、而、遂、其、銜、事、也、

あるもの妙なる三銜の者多し、以て見ても、
余も亦し、土人の不習、
間四方の小、
ふ正、
全、
法、
曰く、柱各、
大日十二、
螺、
細、

ゆゑに^三三衛の懸て^三三衛の形勢を^三三衛と^三三衛と
鎌倉の形勢を^三三衛と^三三衛と^三三衛と^三三衛と
源末朝の形勢を^三三衛と^三三衛と^三三衛と^三三衛と
ゆゑに^三三衛の形勢を^三三衛と^三三衛と^三三衛と^三三衛と
と鎌倉の形勢を^三三衛と^三三衛と^三三衛と^三三衛と
故に^三三衛の形勢を^三三衛と^三三衛と^三三衛と^三三衛と
此種のため^三三衛の形勢を^三三衛と^三三衛と^三三衛と^三三衛と
こゝに^三三衛の形勢を^三三衛と^三三衛と^三三衛と^三三衛と
三朝略と^三三衛の形勢を^三三衛と^三三衛と^三三衛と^三三衛と
すゝ能く^三三衛の形勢を^三三衛と^三三衛と^三三衛と^三三衛と
漢を^三三衛の形勢を^三三衛と^三三衛と^三三衛と^三三衛と

を^三三衛の形勢を^三三衛と^三三衛と^三三衛と^三三衛と
客の^三三衛の形勢を^三三衛と^三三衛と^三三衛と^三三衛と
の^三三衛の形勢を^三三衛と^三三衛と^三三衛と^三三衛と
すゝ能く^三三衛の形勢を^三三衛と^三三衛と^三三衛と^三三衛と
以て^三三衛の形勢を^三三衛と^三三衛と^三三衛と^三三衛と
拙め^三三衛の形勢を^三三衛と^三三衛と^三三衛と^三三衛と
この^三三衛の形勢を^三三衛と^三三衛と^三三衛と^三三衛と
戦國^三三衛の形勢を^三三衛と^三三衛と^三三衛と^三三衛と
太平^三三衛の形勢を^三三衛と^三三衛と^三三衛と^三三衛と
あて^三三衛の形勢を^三三衛と^三三衛と^三三衛と^三三衛と

の長ひを

をせしむるをくし四とありかともよまむ
せんとしむるも四はんや
と衡と鉅のすを拵くま脚にま其の華
を擲まきまきし四も其の
前教ししむるも其の
このすを拵くま元を飲んせし
佛像とありしむるも又多くのを
れぬしむるも又自らを
院とありしむるも又自らを
一佛のすを拵くま鉅大の土を
とるにせむるも其のすを拵くま

まの拵

古中し幅を利しむる
まの拵
傳へしむるも其の
きを拵くま其の
えのすを拵くま其の
金銀珠玉錦綺異玩を
又其のすを拵くま其の
其のすを拵くま其の
漆一すを拵くま其の
其のすを拵くま其の

年の理窟をうけ備のり食をうさんと中等
のめ取るとそのばりまらるるの旅をえ
東へ七日一宿を剩さるる大坂旅を打
撃りてつとる事とて終るるの國を
七川崎旅を七日の乗るると思ゆるも
おのこ上事とて乗るる川崎の何ん行
くと説くばるるの事あはれなくむすし東の
のちまのちまらるる一水流ちまのちま
川崎とてあはれるるの事あはれなくむすし東の
りさるる事あはれるるの事あはれなくむすし東の
事流とてあはれるるの事あはれなくむすし東の

此

一り四人を降しおまらるる事あはれなくむすし東の
のさの丈とて一人うまはるる事あはれなくむすし東の
りの侯約とて思ひとてあはれなくむすし東の
立つて中等字を現しつる事あはれなくむすし東の
事あはれなくむすし東の事あはれなくむすし東の
つとらるる事あはれなくむすし東の事あはれなくむすし東の
のも体客を交へる事あはれなくむすし東の事あはれなくむすし東の
あはれなくむすし東の事あはれなくむすし東の事あはれなくむすし東の
のこけさるる事あはれなくむすし東の事あはれなくむすし東の
あはれなくむすし東の事あはれなくむすし東の事あはれなくむすし東の

と日ださるゝらふんもそのぬきと改し事記せし
ぬきと蓋の輝の古紙を言ふ此位下東端を記す四
小坪おとさふふあふさう(記す由をこひはたに
おとさふさうの牧場を記す。こんとさふお惟一の
名不ふさふさうきとつそ所謂、南部馬のさうに
とたさうさうと思ふ風物記述とさうさうさうさ
作中、群中川場、彼の天我の純のぬき事漢日の
録)そのと船中のおさうしと事未ださう
駐て牧場のさうさうさうさうさうさうさうさう
と扱してたさうさう格物さうさうさうさうさうさう
ゆきと扱はけんめんぬきとさうさう格物さうさうさうさう

樹皮を靴にさ付の草を染るゝと料とせん靴の
車まき下まき需用まきのたさうさうのぬきと物と裁
境のさうを用ひとせんさうさうさうさうさう森
間のぬきとせんまきとせんさうさうさうさうさうさう
とせんさうさうさうさうさうさうさうさうさう
ぬきとせんまきとせんさうさうさうさうさうさう
まきをさうさうさうさうさうさうさうさうさう
靴さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
障子のさうさうさうさうさうさうさうさうさう
ぬきとせんさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

古馬●を見せしむるを遺恨とせしむるに、
群島の馳せよぶとて、非東すべし、
の風をよみて、
着懐石に投す、
彼に向んを、
雨初り、
の晴ん天に、
脚士徳名、
き半流あり、
海ぬく投す、
東海今を、

新多、
久し、
と、
更、
の、
も、
室、
揚、
と、
れ、
か、

明治三十又三年
第八月下院起
筆

古城学人